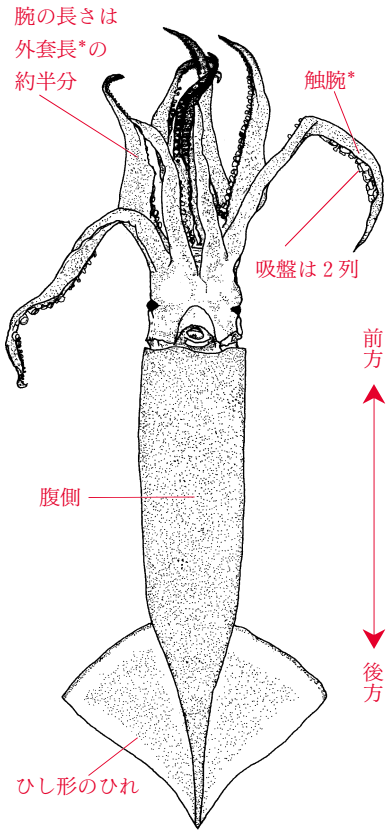
ツツイカ目Teuthoidea
アカイカ科Ommastrephidae



83. スルメイカ
Todarodes pacificus
Steenstrup
図版33

英　名　Japanese common squid
露　名　тихоокеанский кальмар（チホオケアンスキー カリマル）
地方名（北海道）　マイカ
漢　字　鯣烏賊（するめいか）、真烏賊（まいか）
アイヌ語名　エペペッケ

【形態】　外套膜（がいとうまく）*は筒形で中央部がやや太く、後方はしだいに細くなり後端はとがる。眼はヤリイカ類と異なり、透明の膜に覆われない。腕の長さは外套長*の約半分で、吸盤は２列。体の後部にあるひし形のひれの前縁は、外套膜の半ばに達しない。漏斗溝（ろうとこう）*には縦の溝があるが、側部にポケットのようなひだはない。外套膜の背側の正中線上には、暗色の縦帯（じゅうたい）*がある。大きいものは外套長30cmを超える。

【生態】　東シナ海から黄海、日本海、太平洋北西部、オホーツク海に分布。生まれた時期の違いから、秋生まれ群、冬生まれ群、および夏生まれ群の３つの季節群に分けられるが、各群の産卵場や分布は地理的に重複する。北海道周辺には、冬生まれ群と秋生まれ群が多く来遊する。いずれの群も北海道では産卵せず索餌（さくじ）*のために来遊する。

冬生まれ群は九州南西岸から東シナ海で12～翌３月に生まれる。稚仔（ちし）*は成長しながら太平洋では黒潮*、日本海では対馬暖流（つしま）*によって北へ運ばれる。８～９月に分布を最も北に広げ、日本海では沿海地方やサハリン西岸、タタール海峡にまで達する。太平洋では北海道東部から千島列島南部に広がり、そ

の一部はオホーツク海にも入る。9月ごろから水温の低下や性成熟*の進行に伴って南下回遊*に転ずる。日本海で成熟*した個体はそのまま日本海を南下するが、太平洋とオホーツク海からそれぞれ津軽海峡と宗谷海峡を通って日本海を南下するものも多い。

秋生まれ群は9～11月に、冬生まれ群の発生場所より少し北寄りの九州西岸から日本海南西部沿岸で生まれる。稚仔は対馬暖流に運ばれて日本海を北上し、太平洋にはほとんど現れない。5～6月には対馬暖流と北方冷水の境界に形成される極前線*付近に密集し、7月ごろ日本海全体に広がる。8～9月には南下回遊を始め、日本海沖合を通って産卵場に戻る。

スルメイカの分布水温は約3～25℃と幅広い。昼間は水温の低い底層、夜間は水温の高い表層にいると考えられており、短時間の水温変化にも適応している。また、0℃から－1.5℃の水温下では仮死状態になるが、数時間後に通常の分布水温に戻すと活力を取り戻す。これは氷温麻酔といわれ、活魚輸送に応用されている。

外套長が23cmを超えるころから、雄は雌より先に性成熟し始め、雌が未熟*な時期から交接*する。この時期、交接腕*と呼ばれる雄の右第4腕*の先端部は、吸盤が退化し、太く短くなる。交接は人間の手を組み合わせるように、雌雄がお互いに腕をからませて行われる。その際に雄は精子の充満した精莢*を交接腕で運び、雌の口の周りに精子の塊を植え付ける。産卵時には雌の口の周りに蓄えられた精子で受精する。

外見からスルメイカの雌雄を判別する手がかりは、雄の交接腕と雌に植え付けられた精子の塊である。

スルメイカの寿命はほぼ1年。生後約3カ月で外套長2.5cmほどになり、生後4カ月で約4cm、その後急速に成長し、7カ月で約19cm、9カ月で約24cmになるとされる。雌の方が成長が良く、雌の成体*は雄より約1.5cm大きいが、個体差も大きく、季節群や年、分布海域によっても異なる。

これまでスルメイカの産卵行動や卵塊*は水槽の中でしか確認されていなかったが、最近、天然の卵塊とみられるものが水中カメラで撮影された。水槽の中では、性成熟した雌が直径1m以下の球形の卵塊を、腕全体で支えながら膨らませるように産み出す。卵塊の表面は透明な膜で覆われており、卵は内部のゼリー状の物質によって均等に保持されている。水槽や天然で観察された様子から、自然下での卵塊は海中の水温躍層*付近に滞留し、ふ化が始まるまでその状態を維持すると想像されている。

1つの卵塊に入っている卵は数万～20万粒だが、それ以下の場合もある。卵は長径0.8mm、短径0.7mmのほぼ球形である。抱卵数*は、外套長25～29

スルメイカの幼生（外套長約１mm、２日齢）

スルメイカ幼生の平衡石（５日齢）

cmの個体で32万～47万粒。人工受精実験によると、卵がふ化するための適水温は15～23℃。受精からふ化までの日数は３～８日。水温が高いほど早くふ化する。ふ化直後の幼生*は外套長約１mm。幼生は外套膜の後端が丸く、外套長15mmごろまでは２本の触腕*がくっついており、リンコトウチオン*幼生と呼ばれる。この幼生は海中を浮遊し、深度20～50m、水温15～22℃の範囲に多く分布する。幼生の触腕がくっついている理由は分かっていないが、後に２本に分かれ、餌を捕らえるのに使われる。

成体のスルメイカはオキアミ類*やヨコエビ類*などの浮遊性甲殻類やハダカイワシ類、イワシ類などの小型の魚類を食べるほか、共食いもする。逆にスルメイカはブリ、マグロ類、サメ類、イルカ類などの重要な餌でもある。